



會

第十六卷  
第五號

ア

ラ  
フレ  
ー  
ベ  
ル

娘  
と  
子  
と  
毛

## 第十六卷第五號目次

保育材料の循環的排列

「エミール」の幼児教育の感懷(三)

和田 實

福島政雄

ブローニー女史を憶ふ

ブローニー女史を憶ふについて

ベラ・アルウキン

倉橋惣三

お話の仕方

紹介子

説小夏子

本誌定價  
一冊郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢  
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割  
埠

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ  
込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六  
番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

庶務及會計に関する御用務は東京女子高等師範學  
校附屬幼稚園内フレーベル會事務所宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々  
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正五年五月五日印刷納本

大正五年五月五日發行

東京府豊多摩郡代々木幡村大字代々木山谷一二四  
編輯兼發行者 倉 橋 惣 三

東京市本所區番場町四番地  
印 刷 者 平 井 登

東京市本所區番場町四番地  
印 刷 所 凸版印刷株式會社本所分工場  
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內  
發 行 所 フ レ ー ベ ル 會

# 婦人と子ども

大正五年五月五日  
第十六卷 第五號

## 保育材料の循環的排列

目白幼稚園長 和田 實

私の幼稚園でやつて見たいと思つて居りますのは保育材料の循環的排列といふ事であります。之は前から考へて居た事であります。外の大きな子供の教育にも必要であります。幼稚園児には特に必要なのであります。大體は保育材料を一年間に一通り排列して、毎年くりかへしてゆくのです。凧揚げが正月にあるとか、大抵季節によつて遊戯材料が定まつて居りますから、それを觀察して統計を取つて實行してゆけば、自然に保育案が出来るわけであります。一年間を排列を實行してしまふので三年間には三度くりかへす事になります。

唱歌の材料なども三年間にだん／＼むつかしいものを教へてゆく仕方もありませんが、一年間に

自大正五年四月 至大正六年三月 目白幼稚園保育材料豫定細目表									
月	週	項目	直	觀	談話	唱歌	手工(一紙の)	手工(二紙の)	手工(三紙の)
七	五	一 雞 及 雛	桃	太郎	太郎	雲雀は唱ひ	貼り紙	手工(一紙の)	手工(二紙の)
六	四	三 雀 み す	桃	太郎	太郎	雀は唱ひ	三星	手工(三紙の)	手工(粘)
草の色々	蜂	お玉杓子蛙	花	舌	切	桃	貼り紙	手工(豆)	手工(粘)
活動玩具	笛	犬	咲	爺	雀	桃	三星	書	書
の話	のと	と影	と	爺	すと	折り紙蝶	同	方	方
てふく	汽	笛と太鼓	笛と太鼓	車	一	武 賽 赤 十 字 家	同	同	同
日 章 旗 船	こ	松 風	松風	松	二	田 菱 形 家	同	同	同
		双	双	雙	同	扇	同	同	同
		船	車	船	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
七	六	五 太 三 二 一	太	三	二 お 供 へ 旗	だんご彌次郎兵	彌次郎兵	彌次郎兵	彌次郎兵
大	根	鼓 梯 門 居	鼓	梯	門	鳥	彌次郎兵	彌次郎兵	彌次郎兵
梵鐘梯子	方	體 漏 四 三 螺	梯	漏	丸	直	彌次郎兵	彌次郎兵	彌次郎兵
渦	池	角 高 春	角	富	線 田 摘	線	彌次郎兵	彌次郎兵	彌次郎兵
袋	池	高田馬場	春園	甫	草	線	彌次郎兵	彌次郎兵	彌次郎兵

配當して毎年同じものを教へるといふ事も一方法と致します。勿論出來方に優劣はあるでせうけれども一向それで差支なからうと存じます。始めてはいつた子供のまはりかねる舌も、年長の方の正しい歌ひ方になつてゆく事が出来ると思ひます。かういふ風な仕方は管理上によほど便利があります、各組の人數を一定して入園兒のはいつて来る處はよいが、園兒の少い處、殊に小學校入學前の

大きい子供のはいつて来る處などでは、短い一年間に幼稚園教育の一通をわからせたいと思ふやうな場合に、教材を一年間に配當するのは便利な方法であります。それから一年間以上在園したものには修了書を與へる事にして居ります。左の保育案は、私が先きの幼稚園で用ゐましたのを訂正して作つたものにして、只今實行して居るものであります。



考 備

一、掲げたる項目は凡て新に教へ又は指導するところのものにして之に伴ふ自由製作隨意製作は茲に記せず  
二、此表以外尙手技用の恩物あれとも多くは一定の教授要目を要せず隨意遊び方に屬するを以て茲に記せず  
三、普通玩具及運動具等の遊び方に就ては未だ一定の豫定を定むるに至らず故に茲に記せず

初等教育は直觀からはいらなくてはならぬといふことはベスタロツチ以来の原則であるにもかゝらず之を實行するといふことはなか／＼むづかしいのであります。やゝもすればかけ圖によつたりするのがあるが、直觀は直觀であつて説明であつてはならぬのであります。直觀は全くの直觀で、實體のものにしなければならぬのであります。勿論子供が物を觀察したら、質問をする事のある場合に。之れに應じてやるといふ事はよろしい。

出来れば直觀を毎週に排列して、其週間の保育の中心にしたいと思つて居ります。即ち直觀したものを利用して、唱歌書き方談話などに用ゐる事が出來れば最有効だと思つて居ります。

談話の材料は、一年間に配當してくりかへしてゆくのでありますから、一年間に五十種ほどあればよいわけであります。子供が三年間居る間に三度きくやうになつても一向差支ないと思ひます。雨降りなどのつゝいた爲めに談話材料を多く要す

る場合もありませう、そんな時には餘分の教材を用意しておいて間にあはせるやうにするがよいと思つて居ります。表には模範的のものばかりをあげてありますが、此外にいくらももつて居て差支ないとと思つて居ります。紙細工は大體に於て三部に分れて居ります。書き方なども隨意にやると云ふ事でよいと思つて居ります。小學校に於ける書き方とは全意か違つて居ります、小學校の方では寫生が大體に於て目的になつて居りますが、幼稚園では自分の意志を發表する爲めに書き方を習はせます。案の始めに直線の練習、圓の練習などあります。ですが、實際やる時には直線練習だから直線をかゝせるといふ事ではない、たとへば障子をかゝせるとか、鐵道線路をかゝせるとか云ふ事にして子供に興味をもたせるやうにして居ります。部分的のものと始めて練習させておいて、それから一つのまとまつた個體をあらはす事に導いて行かうと思ふのであります。たとへば前に練習した線を

應用して山とか木の書き方を教へるといふ風にします。子供は非常に喜びます、そして山といふものは木といふものはかうしてあらはすものと大體の發表の仕方を會得してゆきます。寫生に興味をもつのは小學校以上の児童であります。

こゝでは園外保育といふ事につとめて居ります。規定してやるのは一週に一度ですが、出来るなら三度位やりたい考へであります。私はいつも園外保育をやかましく主張して居ります、直觀を擴充してゆく爲めに幼兒教育には非常に大事な事でありますから。

玩具はこゝには大體フレーベルの恩物を用ひて

### 「エミール」の幼兒教育の感懷(三)

文學士 福島政雄

### 三、自由の園

自然の児は自由であるべき筈であるのに、さぞ

ちない人の世はすべての人の子を捕へて小さくせ

居ります。モンテッソリーの恩物も女子高等師範から送られたので併せて用ひて居ります。その外普通玩具の價値のあるものをなるべく多く用ゐるつもりで居ります。種類から云へば普通玩具を最も多くして、自由遊びにはそれを用ひさせるることにして居ります。

一體幼稚園は監督して遊ばさせるといふ事を主とするものでありますからその方面に力を盡したいと思つて居ります。普通玩具が少くて、遊ぶ材料に困るといふやうなのは幼稚園としては非常な缺點と思つて居ります。(文責在記者)

まき檻の中に入れやうと試みる。入るゝものゝ誤りか入れらるゝもの過ちか。人の性は檻に入れられて永遠に矯められねばならぬほどに悪であらうか。自然のまゝに自由の境にはなれたる時、幼な児は自由の味をあらぬ毒酒の味と味ふのであらうか。心は永遠の拘束を受けねば永遠の放埒の道を辿るのであらうか。あゝ荒れ狂ふ野の中にやられて止めどもなく駆け行くのが自然の人の心であらうか。春の野の緑の草に樂しげに遊ぶ小羊の平和の自由は人の心に味はれぬものであらうか。

昔から幾世代の人が幾世代の思考に思考を重ねて人々の意見は自ら二つに分れ、一は人の性を善なりとして其の自由の發展を叫び、一は人の性を惡なりとして其の外部的拘束をはかり。何れか是何れか否、何れか眞何れか偽であらうか。今はこれに就いてのルートーの考を少しく探つて見たいと思ふ。

ルートーは子供の自由といふことについて如何

に考へたであらうか。次に述べる所は其の言葉の大略である。

我々人間は奴隸的の偏見に囚はれて居る。我々は習慣上強制をしたり制御をしたり又は拘束をしたりばかりして居る。人間は皆生れて奴隸となり死んでも奴隸の境を離れることが出来ぬ。人間といふものは生れると直に襁褓の中にぐるぐると巻かれる。死ねば棺に入れて釘づけにせられる。そして此の世に生きて居る間は我々の制度の拘束を受ける。我々は子供が生れると先づ頭の形を色々に捏ねあげて揃へてそれからその中に我々の哲學者の思想などを注ぎ込んでそして一定の形にあてはめやうとする。

子供が母の胎内より出づるや否や子供はその手足の自由を味はうとするけれどもそれはなかなか許されない。手足を自由に延ばしたり動かしたりすることは許されないで拘束せられる。子供は長い着物を着せられ、頭を動かすことも容易では

ないし手は身體にぴったりとせられてなか／＼自由に動かすことが出来ない。リンネルにつゝまれる。その外種々のものにつゝみこまれる。其のために子供は少しも其の身體の位置を變へることが出来ない。此の如くにして子供が息を止められないならば實に幸福と言はねばならぬ。

初生兒は其の手足を伸ばして動かす必要がある。そして胎内に居たときの窮屈な有様の取かへしをせねばならぬのである。然るにその運動を妨げるとは何事ぞ。恰も子供が生きて居るしに動くのを恐れるやうにするのは何事であるか。此の如くにして子供の生長を助ける運動は非常なる障害を受ける。子供は非常に努力して此の障害を除かうとするけれども努力すれば努力するほど彼の力が消耗するばかりである。故に子供は母の胎内に居る時に不自由な目にあつて居るのでと同じく生れ出でしも不自由な目にあふばかりである。子供が出生によつて得る自由の幸福などは殆

んど何もないものである。

人間が子供の手足を動かないやうにして束縛して得る結果はたゞ一つである。即ち血液の循環を悪くして子供の力の増加や生長を止め從つて健康を害するといふことになるばかりである。故に斯様な束縛の行はれない所では人間が一般に大きく姿も宜しい。子供を束縛する習慣の地方では様々の不具者や姿の悪い者が非常に多いのである。人は子供が自由に運動して不慮の怪我でもして不具になることを恐れて束縛するのであるけれども實は束縛した爲に子供の不具になるものがよほど多いのである。

此のやうに子供に束縛をあたへることは啻に子供の身體に影響を及すことには止らないのであるから、恐るべき壓迫は子供の心情や氣質に必ず大なる影響を及さずには止まぬものである。子供が最初は感する感覺は苦痛に満ちた感覺である。實に子供は手がせ足がせを入れられた罪人よりもな

は不幸である。甲斐なき努力をつゝくるうちにやがて子供は次第々々に悪くなつて來て泣き叫ぶことが多くなつて來る。諸君は子供は涙を以て此の世の光を見るなど、言ふけれども余の信する所によれば諸君は初から子供の自然の發達に反対するやうなことをして居るのである。諸君は搖籃の子供に與へる第一の送りものとして拘束といふことを與へて居るのではないか。諸君は子供の爲に注意をして世話をして居るなど、考へて居るのであらうけれども實は苦痛を準備して居るのでないか。而して子供はその自由にすることを許されるものはたゞ其の聲ばかりであるから其の聲をあげて其の苦痛を訴へるのは實に尤もの次第ではあるまい。子供の訴ふるが如き泣聲は諸君が子供にあたふる苦痛を物語るものに過ぎないではないか。若しも諸君が子供と同じやうに束縛せられるならば諸君は必ずや子供の幾層倍の大聲を張りあげて泣き叫ぶに相違ない。

此のやうな道理に合はない習慣は何から起つたものであらうか。それは母親がその自然の務を怠つて哺乳のことを乳母などに打まかせてしまつたことから起つたのである。乳母などはどうしても出来るだけ手のはぶけるやうにして子供を取り扱はうとするものである。そのためには子供の自由といふやうなことは全然考へないでたゞ自分の便利な方法ばかりを考へて子供を束縛して置かうとするものである。子供が不自然になるのは寧ろ當然のことではあるまい。若し自然のまゝの自由の境に置かれて育てられた子供ならば部屋の隅の所にねかして置いても決して泣いて人を困らせることいふやうなことはないのである。

故に世の母たる人々よ。眞に母親たるの價値ある母親は喜んでその子供を自分の手で育て、喜んで子供のために都市の生活をして、田舎に於いて其の教育の爲に身を捧げる所以である。束縛せられた子供はその顔色が暗赤色を呈して居る。斯様な

子供が若しも泣きもせずにおとなしくして居るならばそれは泣く力さへも失つてしまつたのである何といふ痛ましいことであらうか。

人或は言ふものがあらう。自由のまゝにすることを許された子供は自分自身に害になるやうな所に行つて彼自身の力やその手足し美しい形を損ふやうなことを爲すではあるまいかと。併しこれは實に杞憂であつて未だ嘗て實際に證明せられたことはないことである。自由に子供を育てる人々の間に於いては子供が自分に怪我をして不具になるやうなことは殆んど一つも無いのである。子供はまだ優しく柔かである。故に非常な危険などをするといふ氣づかひは殆んど無用である。若しも子供が一寸でも不自然なことをしやうとすれば非常に苦痛を感じ其のためにその情態をまげられずに再び正しさを自然にするやうになるものである。

右はルーソーの述べて居ることの大要であるが我々はこれによつて何事を悟ることが出来るので

あらうか。我々はこれによつて子供の自由といふことが極めて大切であるといふことを感せざるを得ないのであらう。自然是子供に柔かなる手足をあたへ未だ決して強き力を與へない。子供はその與へられた力を自由に自然のまゝに無理をせすにつかつたならば決して身を害するやうな結果になるはないのである。然るに我々が子供を育てるにあたつては往々にして此の自然の妙用を無視して妄りた人意を加へ、子供の手足を窮屈にして自由に動かないやうにし、そしてそれが即ち子供を大切に取り扱ふ所以であると考へて居る。併しながらが自然の力といふものはそれほどまでに拘束をせねばならぬほどに悪いものであらうか。我々は自然を壓迫することによつて子供の生ひ立ちに善の開展を望むことが出来るであらう。此處には大なる疑なきを得ないのである。而してルーソーの言は蓋し背繁を得て居るものと信ずるのである。

静に思をめぐらして子供の生活を觀察して見る

がよい。我々幾十年の人生の行路を歩して自然ならぬ人爲の僞を以て恰も自然のやうに感するほどに神經のすさんだものから考へたならば我々の心のすゝむまゝに行ふといふとは大なる福の本であつて我々は出來得るかぎり物の正しき道理を考へそれに従つて行はねばならぬといふことも尤もなことであるのであるが、生れたまゝの子供の心が果して我々の汚れた心に比べられるやうなものであらうが。汚れた心にこそ身を損ふやうな不自然の心も起るのであるけれども、未だ塵の世の塵にしまぬ子供の心に果して我々のやうな不自然の要求が動くであらうか。人間は可愛らしい子供として生長する其じめから汚れに汚れた心を持つて居るのであらうか。どうしてそんなことがあらうか。人の世は塵に汚れて人の世の旅の前途の子供の心は純潔である無垢である。純潔無垢の心が動いて自然に出でた欲求に何の誤れることがあらうか。故に子供の心の自然に出づる子供の行は決

して妄りに壓迫すべきものではないのである。此に於いてか自由は子供の爲にゆるされねばならぬ。無心の子供が自然の心と解けて無心の裡に行動するときにそれは決して束縛せらるべきものではなくて寧ろ自然のまゝにそれを發展させねばならぬものである。子供は自由の園に育てられねばならぬのである。

愛らしい呱々の聲をあげてはじめて此の世の光を浴びた子供が今まで窮屈であつた母親の胎内とは全然ちがつた廣い世界にその小さき手と小さき足とを自由にのばして自由に動かうとするそのはたらきこそは子供の心の自然に發達する第一歩ではあるまいか。それを無理にも拘束しやうとする大人の心は何といふ無情な心であらうか。子供を愛するとは名ばかりであつて子供を苦るもの實にこれより甚しきはないのである。ルーソーはよくこそ此の間の消息を痛切に述べて居るのである。併しながら子供の自由を尊ぶと云つても單に放

任して何等かへりみることがないといふことを意味するのではない。自由の花園には優しき花守が常にその花園の生ひ立ちに氣をつけて暖かい日の光にあたるやうに潤の雨のそゝぐやうにと心をつけて居ることを我々は忘れてはならぬ。又の優しき花守こそは慈愛の化身たる母親である。自然の花が自然のまゝに美しく咲き綻びるためには日の光と雨の潤とがなければならぬ。自由の花園に咲き出づる愛らしき撫し子の花は母の慈愛の光と潤との心につゝまれて生ひ立たねばならぬ。それでなくてどうして自由の發達といふことが出来やうか。自由にならうとする力は自由にしやうとする慈愛にあはすに眞に自由になるものでは決して無いのである。母親が慈愛の心から子供の心を視る時に母親の心に自然に湧き出づる尊き情は、決して子供を不健康にしやうとする心でもなく又子供のために束縛しやうとする思でもない。實に純なる母親の心はたゞ一すびに子供のためを思ふばかり

りである。其の心の中につゝまれてはぐゝまる、子供の心が何の無理もなく自然に美しく生ひ立ちゆくところに眞の自由の園があるのである。即ち眞の自由の園に包容せられた精神の花園である。そこには何等の束縛の事實もなく何等ぎごちない意識もなく母の心は慈悲に燃えその心は自然の樂の境に融けて母と子との心は一つになり、止むに止まれぬ情が其の間に動いて健康發育、至心は自らそこに湧き出るのである。あゝ何といふ美しさであらうか。これこそは精神的にゆかしさにたへぬ教育の花園としての家庭ではあるまいが。人の性は束縛すべき惡ではなくて融和すべき善であるといふやうなことも此に至つてはじめて言ひ得ることではなからうか。あゝ優しき母の手にいだかれて愛らしき手足を心のまゝに働かすことの出来る子供の前途には如何ばかり樂しき希望が充ちて居るであらう。その希望のかゝやく所こそは尊き自由の園であるのである。

# ブロード女史を憶ふ

玉成保育養成所長 ベラ・アルウキン

ブロード女史は名高い方で御座いますから、どなたもよく御存知のこと、存じます。私はたいへん女史に親しく接して感じました一二のことを申上げませう。

女史はニューヨークの田舎のカゼノーヴィアといふ處に住まつて居られました。そこは小さな村で、湖水に近い景色のいい處で御座います。私の叔母が矢張りそこに住つて居りまして、私も叔母の家に滞留中度々ブロード女史のお宅へお邪魔致しましたが、森の中の極く閑静な、しかし立派なお住ひで、大きな花園などを持つて居られ、ほんとうに床しく、楽しく起臥して居られました。

女史は非常な讀書家でいらっしゃいました。著

書を御覽になつてもお分りになる様に、大層博學な方で御座います。幼児教育に限らず、あらゆる方面的知識に向つて、博い範囲の讀書をせられました。前には幼稚園をおもちになつて、御自分で幼児に接しておいでになりましたのですが、近來では、専ら讀書、それから講演、著述といふ方のことをしておいでになりました。そして八十に近いお齢で、よくもあゝ御勉強が出来御活動が出来たものと思ひます。又大層人格の高い方で、始終學問上の慈善をして居られました。例へば、教育學を研究したい特志の人達を集めて、無報酬で講習を開いたりして居られました。又何か質問でももつて来る人がありますと、どんなお忙しい時でも、

親切に答を與へられました。

女史の講演は大層有益な、そして趣味の深いもので御座いました。私の勉強しました學校の校長が女史の高弟の一人でありました關係からして、學校でも特殊講義を幾度か伺ひました。其のお講義の中には保育案の問題の様な、直接幼兒教育に關することも御座いましたが、もつと一般的な、一例を擧げますれば、希臘哲學のお話や、自由觀念の發達に關するお話などもありました。それから紐育では、幼稚園協會の主催にかかる講習會で既に一通りの研究を終つて居る保姆達の爲に、高等な講義をして居られました。それへも出席して伺ひましたが、全體に獨斷的な態度や偏見など少しまなく、批判的に、指導的に、聽者をして考へさせ自らさとらせるといふ風な講義振りであります。殊に、フレーベルの主義學說に關するお話を伺つて居る時には、どこ迄深い御研究かと驚かれること許りで御座いました。全く女史は、亞米

利加に於てフレーベルの主義の中心で御座いました。

女史のなくなられたことは、亞米利加の幼稚園界の爲に大變な損失で御座います。先づそれを惜まずには居られませんが、次に私にとつても非常な悲しいことで御座います。私は女史から始終御親切な指導をうけ、ローマヘモンテッソリーの研究に參らうとしました時なども、いろいろ意味の深い周到な御指導を受けたので御座いました、それ等の記憶が今一時に胸に浮んで参ります。殊に私は自分の小さい力で保姆養成などいふ仕事を始めましたから、いろ／＼先輩に教へを乞ひ度いことばかりで御座いました、つい先達もいろ／＼の質問を並べてプロー女史の處へ手紙を差上げようとして居たので御座います。あゝ、もつと早く種々のことと教へを受けて置けばよかつたと殘念に思ひます。しかし、もうそれが出來ませんので御座います。（談話。文書在記者）

# ブロー女史を憶ふにつけて

倉 橋 惣 三

## 一

ブロー女史が先々月の末長逝せられたといふ報（前號所報）は、私にいろ／＼のことを思はせた。

私はブロー女史とは面識も手紙の上の交際もないたゞ其の著書を通じて知つて居るだけである。正直にいへば、生前の女史に對しては、亞米利加に於ける純正フレーベル主義派の一代表者として、主として批評的に見て居たのであつた。數年前の

殊に私の何となく感ずる處では、或は此の人が所謂純正フレーベル主義高唱者の最終の第一人者ではあるまいかなぞとも思をれるのである。勿論、どこに隠れたる偉大な研究者が居るか分からぬ。又此の後とても、續々研究者は出るであらう。しかし、種々なる幼児教育論の表に立つて、一方の雄として、此の派の所論を信念的に且つ學問的に高潮するの力と深みと博さとを有すること女史の如きは今の時勢が多く生みそうにもない。私は所謂純正フレーベル主義者の固執の中に賛成の表し

て來た。私は、我が幼児教育の爲に、どんな少しの熱心でも持つて與れる人に對して、感謝とか尊重とかいふ情を持つ。況んや此の偉大なる斯界の貢献者に對して、如何に多くの敬意を表すべきかを知らないのである。

ブロー女史が先々月の末長逝せられたといふ報（前號所報）は、私にいろ／＼のことを思はせた。

私はブロー女史とは面識も手紙の上の交際もないたゞ其の著書を通じて知つて居るだけである。正直にいへば、生前の女史に對しては、亞米利加に於ける純正フレーベル主義派の一代表者として、主として批評的に見て居たのであつた。數年前の

殊に私の何となく感ずる處では、或は此の人が所謂純正フレーベル主義高唱者の最終の第一人者ではあるまいかなぞとも思をれるのである。勿論、どこに隠れたる偉大な研究者が居るか分からぬ。又此の後とても、續々研究者は出るであらう。しかし、種々なる幼児教育論の表に立つて、一方の雄として、此の派の所論を信念的に且つ學問的に高潮するの力と深みと博さとを有すること女史の如きは今の時勢が多く生みそうにもない。私は所謂純正フレーベル主義者の固執の中に賛成の表し

得ない點をも持つのであるが、また濫にフレーベルの主義を無視して其の深い大きい貴重さを知らない徒輩にも與し得ないのである。此の意味に於て、私は、幼兒教育の研究者として、どこ迄もフレーベルの研究者である。而して眞の理解と眞の批判との態度を以て、私のフレーベル研究に、最も有益な伴侶となつて呉れたものは、少くも其の一つはプロー女史の著書であつたのである。若し面晤する機會があつたならば、此の人につ隨分思ひ切つた手答へのある議論を聞くはし得ると思つたのであつた。そしてフレーベル研究に益する所最多かろうと思つて居たのであつた。私の狭い見聞では、幼稚園教育に關する研究書は、たゞ傳承的な註釋風なものか、然らずんば獨斷的な勝手放題のものかゝ多い。結論や主張はとに角く、問題の取扱ひ法が研究的に、すなはち基礎の上に立つ批判を以てして居るものは極めて少ない。従つて人をして傾聽せしむるに足るものが極めて少な

い。プロー女史の態度は、此點に於て恐らく最立派なるものであらう。殊に『幼稚園教育論叢』(Educational Issues in the Kindergarten) に於て、此の態度が美事に成功せられて居る。そして、批判的取扱ひをして居ながら、しかも、フレーベルの中心思想に向つて、常に深みのある、熱のある理解の態度を持せられて居る處に、私達はいろいろのことを學ぶのである。フレーベルは、其の最よき使徒を喪つたことを天にあつて惜んで居るであろう。

## II

プロー女史の著書は、全體の調子が學究的である。『母への手紙』(Letters to a Mother) の様な目的が極く通俗的なものに於ても、たゞ實用的といふよりは理論的である。主としてフレーベルの『母と子の遊戯』の解釋を説いた『象徴教育』(Symbolic Education) に於ては問題が問題だけに一層理論的になつて居る。前述の『幼稚園教育論叢』は殊にそ

うである。又亞米利加の幼稚園協會から出版して居る幼稚園研究の報告『幼稚園』(The Kindergarten, Reports the Committee of Nineteen on the Theory and Practice of the Kindergarten) の中のプローラ女史受持の報告でも、他の委員の報告に比し、著しく理論的である。而して、元來が哲學的な要素の多いフレーベルの思想を理論的に解釋するとなれば、自然に哲學的な調子のものになる。そこで、多少難解な傾向を生ずる。殊に幼兒教育の問題といへば、頭からたはいな事、淺いこと、軽いことに考へて居る人達には、恐ろしく六かしいものに思はれる。一體フレーベルの著書がそうである。何も特別難解な書物といふではなく（分り易い書物ではない）此位の難解さの本はいくらもあるのであるが、問題が幼兒教育のこと、いふので、讀者が豫め氣樂な心持で読みかゝる爲に、まじつくこと甚しいのである。そして、もつと『大問題』ならば六かしいのも已むを得ないが、高が幼兒教育

の問題でこんな六かしいことは言はなくともよからう、といった風な感を持つのである。併し、幼兒教育の問題は、所謂『子供のこと』だからとて、そんなたはいな事、淺いこと、軽いことではない。プローラ女史が、常に非常に大きな見地から幼兒教育のことを考へて居るならば、そのこと自身大に教へられることである。

プローラ女史を懷ふて此點に至る時に、私の心の中に、我國幼稚園教育界の現状が反對聯合の法則を以て、あり／＼と浮んで來るのである。すなはち、我國の幼稚園界の現状は、プローラ女史が幼稚園に對する態度とは、甚だ反對なる態度をあらはして居る。直言すれば、我國現在の幼稚園界は、幼兒教育といふことを考へるのに、極めて淺く軽く淡い。換言すれば根底となり根據となる哲學がない。之れは我國の教育界全體を通じてのことかも知れないが、幼稚園教育に於て殊にそうである子供は愛して居るに相違ない。保育の必要は分つ

て居ないではない。保育の方法については研究せられて居る。殊に日々のことには最熱心である。  
しかし、それだけでは足りない。

私は幼稚園教育界に、明確な人生觀を持し、遠大な人生の理想を持ち、又自らこういふことに充分努力して居る人が、決して少くないこと、思ふ。しかし、中には隨分こういふことに呑氣な人もありはすまい。素よりものは程度問題であるから、其の程度は種々であるに相違ないが、こんなことは、幼兒教育者としては、(幼兒教育者なるが故に)どうでもよいこと、呑氣に構へて居る人はありはすまい。私はよく聞くことがある。私達は子供の遊び相手なのですからと。之れは假令謙遜の言辭としても、自ら愚にしがた言ひ方である。又聞くことがある。幼兒相手ですから理窟も何もありません。氣樂なものでしょ。之れは通常的なさばけた物の言ひ方かもしれないが、聞くものには誤解され易い。若しそれ自らこんな軽い

心持ちで居るのならば、それは幼兒教育を侮るものと言つてよい。兎に角くに、ブロー女史の幼稚園觀などを一方に置いて見ると、我國幼稚園界の此の現状が對比的に深く感じられて來るのである。ブロー女史を懷ふにつけて私の今最も著しく感じて居ることは此のことである。

### 三

幼稚園教育は其の對象から言つても、仕事の形式から言つても、教育の中の小さい部分である。しかし、此の小さい部分を正しく理解する爲には教育全體の大きい根本的意義から考へられなければ分るものではない。又教育の根本的意義を考へるには人生そのもの、考へ方から考へられなければならない。而して人生そのもの、考へば分るものではない。而して人生そのもの、考へ方には、時代々々のいろいろな思潮や學問が大きな影響を及ぼして來る。すなはち、我々の幼稚園教育の研究は當然茲まで溯るのである。ブロー女史は『幼稚園教育論叢』の序に、最近三十年間に於

いて、幼稚園より大學に至る總ての教育過程は、其の宇宙觀、心理學說、社會生活によつて大に影響せられて居る。此の著の第一の目的は其の影響が幼稚園の上に及ぼせる結果を考究して見度いのであると言つて居る。如何に其の考察の仕方の大きいかを見るべきである。そして總ての問題が、皆それ／＼の哲學的基礎の上に論究せられて居る。或は理想主義を説き、自然主義を評し、プラグマチズムを論じて居る。殊に同書の最後の章の『三種の世界觀』の如きは、普通の淺見者流には幼稚園教育論中の一章とは思ひもかけぬ様に見えそうな位である少くも多少なり哲學上の基礎知識がなくては、一寸分り難い。普通の教育書や教育論が、たゞ實際的に、たゞ方法的にのみ教育の問題を取扱つて居るのとは、大に其の趣を異にする。私は今こゝにブロー女史の論の内容を一々紹介しようとはしない。しかし、こういふ風に大きい見地から幼稚園の問題を考へること、或は寧ろ、幼稚園教

育の問題を充分正しく理解し得るために、其の實際問題、方法問題の他に、根本問題を始終研究せらるべきことを、我國の幼兒教育界に切に促し度いと思ふのである。

小さな井戸でも、それが真に盡きない井戸であるためには、地下の眞源に達しなければならない而して井戸そのものは小さなものでも、其の連つて居る處は大きな地下の水脈である。此の水脈を知ることなくして、井戸を解することは出來ない。幼稚園も其の通りである、一寸のぞいただけでは小さな淺いものである。しかし、眞源たる水脈はどこ迄廣いもの、どこまで深いものか分らない。而して、其の水脈を離れた井戸は涸れ井戸である。但し私はブロー女史の研究態度を賞揚することによつて、我國の幼稚園の考へ方も其の通りでなければならないといふのではない。如何なる基礎の上に我國の幼稚園を建設するかといふことは、我々が自ら考へなければならない。決して他人の

説に其のまゝに従ふことはない。しかし、其の態度は、ブロー女史の執つて居る態度の様に、どこ迄も人生の大局から幼稚園を考察してゆくのでな

くてはならないといふのである。之れブロー女史の長逝の報を聞くと共に、女史を懐ふにつけて切に感じたのである。

## お 話 の 仕 方

(Shedlock; "The art of Story-Telling" 二四九)

### 紹 介 子

#### 五、具備したき要素

フレデリック・ハリソンといふ人が「書物の選擇」といふ本の中で次のやうなことを言つて居ります。

さて私は前章に於て實ることのない雑草をこの「整頓せる小區域」に生せしめないやうにしなければならぬといふことをお話しいたしました。私はこれからこの茂林を開拓して作つた小區域に如何なる種子を下ろすべきであるかといふことに就てお話しいたしませう。

茲で一寸おことわりして置くのは前章「避けたき要素」中に於てもお話しいたしたやうに私の對象として居るのは通常の發達を成しつゝある児童なのであります。それ故私の今言はんとするお話なるものもあるゆゑ児童の望むお話を括して居ることである。

るといふわけには行かなくなるのであります。病的に又は異常に発達を遂げて居る兒童は私の對象ではないのであります、何故ならば是等の兒童に對しては殆んど如何なるお話でも提供することが出来るからであります、殊に談話者がその兒童に親近して居りその理解力を承知して居る場合には如何なるお話でも採用することが出来るのであります。斯る場合には年齢に就て論する必要はなくたい發達の程度が問題となるのみであります。

私の經驗上、年齢の如何に拘らず一般に通常の兒童は彼等が日常見馴れ聞馴れして居る物事のお話を好むやうであります。これは理由のあることです、兒童はその想像力が未だ發達して居ない間にはその限られた経験に訴へて物事を理解するより他に途がありません、兒童は己れの経験と比較することによつてお話の虚構フィクションへ入つて行くのであります。これに關して面白い實驗を行ふことが出来ます。それは或る一人の兒童に同じ話を一年な

り半年なりの間隔を置いて繰返して聞かせるのであります。この實驗を行つてみると同じお話の中で兒童の興味を感じる場所が常に一定してゐないといふことが分りますし、それによつて兒童の精神的發達と想像力の漸次覺醒しつゝあることとを知ることが出来るのであります。この實驗は非常にデリケートなものであります。正確には行ひ難いのであります、といふのは兒童は一面隠匿性を有して居ると共にその鑑賞も亦屢々内氣のために或は又は表現法の缺乏して居るために伴られたり隠されたりすることがあるからであります。併し兎に角この實驗は興味のある又同時に爲めになる實驗であります。

次ぎに具備したい要素といふのは異常といふことであります、兒童が精神的に發達して來ると自分の小さな行爲や経験には満足しなくなるのであります、日常普通のお話ではもうつまらなくなつて來るのであります、自分といふものをお話から

引離してお話を味ふ餘裕を持つやうになつて來る

ないことと思ひます。

のであります、この時児童の要求するものがこの異常なのであります。

ジョージ・ゴッショーンといふ人が次のやうに申しました。

幼きものゝために私の望んで居るのは家常茶飯事を取扱つたのでない本やお話である、私は小さい児童の想像力がその小さな生活のイメー

ジよりも更に多くの食料を與へられることを希望する。私は児童がその將來に於て達することなるべき世界へ誘つて行つてくれるやうな美しいお伽話によつて時々刺戟されることのない児童を憐む……私は児童をして事毎にその日常生活を思ひ起さしむるものよりも、児童をその日常生活から多少なりとも移し動かすものを善いと思ふ。

それからお話の中に是非とも取り入れたいのは美を愛する念を起させる要素であります、この美はお話の主人公の性格の美しさから來るもの勿論結構でありますが言語及び形式の美しさから來るものでもよろしいのであります。この目的のためにはバイブルのお話はかなり價値のあるものであります。

これに關聯して申上げて置きたいのはお話の時間に時折幾分調子をつけて児童に詩歌を読み聞かせることの面白い企であるといふことであります児童はこれによつて始めて韻文の美しさを知るに至るのであります。七歳位の児童でも韻文の形式美を感じ得するを難しとしないのであります、極く幼い児童に聞かせるによい詩の例として短い詩を次ぎに掲げてみませう。

私の管見によれば十二歳以前の児童にもお話の中にローマンスを含んだものを與へることは差支

Milking-Time

When the cows come home, the milk is coming

Honey's madele when the bees are humming.

Duck, Drake on the rushy lake,  
And the deer live safe in the breezy brake,  
And timid, funny, pert little bunny,

Winks his nose, and sits all sunny.

(紹介子曰、幾度かの詩を譯るんと努めたるも意味を闡明せんために語句のあまりにリズムを離るゝことを許す能はず、原詩のまゝ掲ぐるの止むなきに至る)

これは英國の有名な女流詩人口セツチの作であります。が藝術的に優秀な、句やかな、可愛らしい詩ではあります。用語も自在ですし、韻を合せやうための苦しい細工も現れて居りませんし、第一モーラリゼーションに急でないのが何より心持がよろこびます。斯る詩が日本にも澤山あつたら甚麼に児童のために好都合であります。

それから又お話の選擇に當つて最も意を用ひなければならぬのはユーモアといふことであります

これは兎もすると下品になり易く児童の感情を粗大にならしめる虞れがあります。下等なユーモアに馴らされた児童は真正のユーモアを解する力を持ち得なくなつて」ひきます。

それから又或る時期に於て原始種族の歴史に關係した迷信のお話も児童に聞かせて置く必要があります。アンドリュー・ラングが次ぎのやうに言つて居ります。

我等が若し未開の先祖を持たなかつたならば我等は詩を持たないであらう。すべてのものを商量し、分析し、實驗するやうな現今之如き進化の状態の中にいきなり人間種族が現れ出たものとしたならば、斯る種族は詩を有せず常識のみを貴しとしたであらう。野蠻人は世界の夢を作つたのである。

しかし斯るお話を児童が何歳位に達した時に話して聞かすべきであるかは問題であります。私は以前は斯るお話は児童の極く幼い頃に話した方が

い、と信じて居りましたが近頃では必ずしも幼い頃に限られて居るとのみ考へぬ様になりました。

駄洒落や下品なユーモアを排する代りとして私は純粹の奇怪のグローリックお話を少しばかり採用したいと思ひます、何故ならば斯るお話はセンチメンタリティや功利主義の緩和剤として相當の功を奏するからであります。併し奇怪ゴロッスといつても極く罪の無い無邪氣なものではなくてはならぬことは無論であります。

それから又お話の中に現して欲しいと思ふのは動物愛護の精神であります、幼い児童に對して動物愛護の精神を鼓吹することは容易であります、何故ならば児童は未だ幼くしてその心を智識のために鎖されてゐませんので、其感的想像力を以て直ちに動物の感情を理解することが出来るのであります。

動物愛護の精神に次いで廣く自然と交る精神を児童に起さしむるお話も結構であると思ひます、

児童が静かな氣分で居て、烈しい活動を望まず、たゞ音の喜びに没頭し得るやうな時、自然の姿をなだらかに寫した美しい文をお話として聞かせるのもいいことであると思ひます。斯るお話を話す際には一應児童にお話の進行中に別に刺戟的エキサイティングな事件は起らないといふことをことわつて置く必要があります、さうすれば児童は氣を落附けて一語一語に耳傾けるであります。

何の位の程度にまで児童に演劇的刺戟ドラマチックエキサイトメントを與へてよいかといふことは問題であります、私は児童が極く幼少である時分には演劇的刺戟をあまり與へない方がいい、と思ひます。けれども児童は一般に演劇的刺戟を喜ぶものでありますからこの慾望を適度に満足させてやらないとあらぬ方へ外れる虞れがあります、それ故こ、の呼吸を見計つて適度に演劇的刺戟を児童に與へることが必要であります。

それから又死を取扱つたお話もいくらか必要で

あります。死の免れ難いものであること、死は不幸ではなく萬人の受くべき通常の運命であることなどを率直に兒童に了解させるために死を取扱つたお話も兒童に聞かして置く必要があります。

## 六、お話に就ての質疑

今まで説き來つた事柄と多少重複する場合もあるかも知れませんがお話に就ての諸種の疑問を以下問答の形によつて述べることにいたしませう。

一、左まで文學的價値を有せざる話術を研究するに斯くの如く多くの年月を費すことを何故必要と考へるか。

これは役者が舞臺藝術が一般藝術の一分枝に過ぎないにも拘らず自己を舞臺に適せしめんがために多年の訓練を行ふと同じであります、

談話者は取りも直さず兒童に取つては役者なのです。兒童は大人が芝居を見たがると同じやうに芝居を見たがるものであります、然る

に彼等は良い談話者をほんの少し、か持つて居りませんので彼等の演劇的要求は満足とせられないのです。結果は何ういふことになります。まえう、私達は止むなく兒童を大人の見る芝居へ連れて行くとか劇としては極めて不完全なお伽芝居を見物させるとかより他はないわけとなるのであります。それ故兒童が極めて幼い頃にはお話を聞かせて演劇的要要求を満足させる方が寧ろ賢い方法であるのであります、兒童は強い想像力を持つてゐますのでお話を聞きながら自分で頭の中に舞臺を描いてゆくのであります、

それ故本當の舞臺に應用せられて居るやうな機械力による技巧的刺戟を必要としないのであります。

二、兒童が「お話は眞實ですか」と尋ねた場合に如何になすべきか。

眞理の了解といふことはその了解した人の眼識に依存する所の關係的事柄であるといふこ

とを児童に教へることは必ずしも不可能ではないと私は信じます、又児童に世の中には或る人には分る事が或る他の人には何しても分らないといふやうなことのあることを話すのを躊躇しないならば児童の懷疑は餘程和らげられるであらうと思ひます、詩歌に於ける虚偽は大なる真を形造るために許されて居ります、それと同じやうにお伽話も大なる真を形造るために虚偽の分子を含むことを許されて居るのであります、お伽話の世界に於て語られる虚偽に對して児童は決して疑ひを起しません、併し現實の中に交へられた虚偽に對しては假令それが如何に小さいものであつても児童はそれに就て直ちに不審を起すのであります。

三、児童がお伽話を好みと云つた場合には如何なる處置を取らるゝつもりなるか。

斯ういふことはよくあるのであります。児童が何故お伽話を好みといふか、鈍感な散文的

な性質のためか、お伽話を味ふ能力が欠如して居るためか、お話の中に現れて来る驚くべきことが嫌ひな爲めか、判断力が非眞實として排斥することを眞實として受取らざる、苦しさのためか、或は又大きくなつて「もうお伽話でもあるまい」といふやうな氣になつて居るためか、まあいろいろの理由はあります。第一の理由のために好まぬといふのであつたならばその眠つて居る想像力が發達して來るまで待てばいいのです。非眞實を有難つて聞いて居るわけに行かぬといふやうな理由であるならば眞理といふものゝ性質をよく児童に話してやればよいのであります。お伽話でもあるまいなどといふのはお伽話をよく味はないのでありますからお伽話を熱心に聞かせるやうにすればいいのですあります、サンタクロースなんていふお爺さんはありやしないぢやないかといふやうなことを言ひ出した児童にはサンタクロースは本當に

實在する人ではないが慈善と親切との化身として現されて居るのであるといふことを話してやればいいのであります。

四、お話を暗記してゐて一字一句版で起したやうに何時も同じやうに話すべきであるか又は自分の言葉で自在に話すべきであるか。

これはお話を種類に依ることであると思ひます、お話をアンダーセンやキーブリングやスチブンソンのものの如くクラシカルな味わいのあるものであつたり、その興味が主として文體に向かれて居るやうなものであつたりした場合には無論一字一句を暗誦してゐて原文のまゝに話すべきであります。併し今述べたやうな種類でないお話をあるならば何遍も原文を讀んでつかり覚え込んでしまつて後自分の言葉を用ひて一語々々にはおかまひなしで話すのがよろしからうと思ひます。非常に天賦の豊かな談話者があつて言々句々珠を列ねるやうな名文句でお話を

をする場合には私の今申したことは孰方でもいいこととなります。しかし普通一般の談話者は上記の兩方法を必要とするであらうと私は思ひます。

五、お話を準備するには何ういふ風にして行つたらばよいか。

お話を準備も亦お話を種類の相違によつて違つて来るわけであります。がすべての種類のお話を通じて準備の際、是非心掛けねばならぬことはお話をすつかり體得してしまはなければならぬといふことであります。お話の中の主人公にすつかり同化してしまはなければいけないのであります。お話をすつかり體得して居る談話者はお話の紹介者でなく一種の創造者となり得るわけであります。お話を準備に關する實際的の注意としては先づお話を原文を暗誦して丁つてから幾度も繰返してみるのです、淀みなく話すことが出来るやうになつたらそのお話を演劇的

に話す工夫をお始めなさい。成丈大きな聲を出

して幾度も練習してみるのです、一人の人を相手として話す時でも成丈大きな聲を出すことに努めるやうにしなければなりません。それから後は言葉の調子、お話の仕上げ等に御注意すればよろしいのであります。暗誦を主としなければならぬお話は言葉の完全といふことを第一にすべきであります、これが出来てゐない内に演劇的の動作などを考へるものは順序が違つて居ります。身振りや間拍子や顔面表情等が言語の選擇を決する場合がありますが一度公演してみた後にはつきりとその結果を知ることが出来るのであります。身振りを練習する時は鏡の前で行ふのが一番よろしいのであります。役者も身振りを練習する時は大鏡の前に立つていろ／＼身體を動かしてみるとどうでありますかこの方法が一番よろしいです。

六、お話を話題として児童と話をし児童に種々の

#### 問ひを發することは如何

これは無論いけません、児童がお話を聞いて愉快を感じる効果は演劇的手段によつたからであります、然るに質問といふやうな手段によつて分析を敢てしその効果を破壊するやうなことはよろしくないのであります、綺麗な花を見てその色を賞しその香を發して居る時はその花が植物學上如何なる部類に編入されて居るかなぞといふことを考ふべきではありません、それは丁度植物學の時間に花あるがために人生が如何ばかり幸福であるであらうなどといつて納つてしまふのと一般でかなり間の抜けた、ビールの泡をわざ／＼立たせて了ふやうな仕事なのであります。

七、お話が済んでしまつた後で直ぐ児童に今のお話を復誦してごらんなさいといふことの可否。

私はこれには全然不賛成であります。児童をして常に表現の機會を持たしめることもさること

とながらこの場合は表現するよりも寧ろ取り入れを爲す時ではありませんか、何の用意もない児童に今聞いたお話を話してごらんなさいといふのはかなり無法な注文です、よし児童が喜んで話すとしてもたつた今談話者によつて興味ゆたかに話されたお話を自分の仲間が覺束なげに

話すのを他の児童が傾聴して居るでありますか、お話をする児童も上手に話せないので恥かしく思ふであります。それよりもお話が済んでしまつてから五分間静かにして居ると児童は今聞いたお話をすつかり印象に止めて了ひます。懃ひな復誦などをさせるよりいくら効果があるか分りません。

八、児童に今聞いたお話の繪を描かせることの可否如何

これも児童が自から望んで描く場合は兎も角此方から望んで描かせるのはよろしくありません、到底お話で聞いただけの印象を繪として現

することは児童に取つて不可能であるのは分り切つた話です、児童の失望に陥ることをよく承知してゐながら斯ることを行はせるといふことはありません。

九、教室に於て話術の演劇的方法を如何に利用すべきか。

學校で地理歴史を教授する時教師が演劇的方法を利用して生徒に話をしたならば生徒は所謂暗記學課を些の苦痛を覺えずに學ぶことが出来るであります。一々具體的の例を取つてお話ししいなまでもその如何に効果の多いものであるかは容易に推察され得るであらうと思ひますからくだくだしい説明は略します。

十、お話の中には演劇的要素を多くすべきであるか、詩的要素を多くすべきであるか。

この二つの要素はお話の中に欠くべからざるものでありますか孰方がといへば演劇的要素の方が優つてゐる方がよいかと私は思ひます、何

故ならばすべての児童は活動が好きで演劇的であるからであります。詩的要素も多く児童の現されない要求であります。演劇的要素は更に強く児童によつて渴仰されるのであります。

十一、お話の中に含まれるユーモアには如何程の教育的價値ありや。

私の茲に言ふユーモアは普通にいふ滑稽とは別の意義を持つもので單に笑ひを意味するもの

ではありません。ユーモアは私達に想像力の働きによつて齋らされた均整感を教へてくれます。ユーモアは児童をしてその論理的機能を發達せしめ勿卒の結論に急がしめない効能を有して居ります。児童に於てはユーモアの發達は極めて遅々たるものであります。急かすに氣を長くそ

の發達を助長してやらねばなりません。(下)

## 小説 夏

### 子

若

葉

一  
芳枝さんや三郎さんや恒敏さんがお山の上で遊んで居る。恒敏さんが、いつもの元氣な顔で、顔に汗を一ぱい流して、何だか大層力んで居る。三郎さんが例のおどけた顔をして、小さい目をまた小さくして笑つて居る。こんど新らしく入園した

芳枝さんは、白い靴下に茶革の半靴を穿いた兩足をきちんと揃へて二人の傍に立つて居る。其の中に恒敏さんが大きな聲で笑ひながら三郎さんを推した。三郎さんはふさけた手うきをして逃げようとして足がすべつて轉んだ。恒敏さんも其の上へ重なりあつて轉んだ。そのはづみに芳枝さんは足

をすくはれた様になつて倒れた。あらつと思つて手を出さうとする間もなく、芳枝さんのきやしやな體がお山の斜面をころがり落ちた。幼稚園のお山だと思つて居たら其の斜面が大層長い。自分もころがる様にして追ひかけてゆくと、芳雄さんはずん／＼下へ落ちてゆく。ふと見ると下に大きな池がある。幼稚園のお池と同じようでもあるし、大層大い様にも思はれる。兎に角くあの中へ落ちたら大變だと思つて、尚ほ急いで追つかけたが、どういふものか足が充分思ふ様に動いて呉れない。その中に芳枝さんは今にも池に落ちようとする。自分は、大きな聲で『何人かつ』<sup>じぶんたつ</sup>と叫んで身を悶へながら両手を伸した。すると両方の手が、それは／＼長く、まるで、あの手長島のお話の中の人の様に長く、すうと伸びて、芳枝さんを抱きとめた……と思つたら目がさめた。

夏子は此頃こんな夢をよく見る。初めて幼稚園へ就職した頃にも、こんな心配な夢をよく見た。

受持ちの子供が保育室のドアで指をしめられた處や、ブランコから落ちた處や。そんな恐ろしい夢ばかり見て、翌日幼稚園へ行つて其の子の無事な顔を見るまでは、心配で心配で、たえられなかつたものである。その後、次第に幼稚園に慣れて來ると、そんな夢は殆んど見なくなつた。そして、毎日々精一ぱいに仕事が出来、精一ぱいに子供と遊ぶことが出来て、夜は疲れ切つて心よい熟睡に入ることが出来た。それが又此頃になつて、どういふ譯かぐやな夢ばかり見る様になつた。但し目がさめてから後は、夢だといふことがよく分つて居て、以前の様に「若しやほんとうだつたら」といふ様な現實化された心配は起らない。しかし、いつも何となく重苦しい變に疲れた様な悪い心持だけが後までつゝいた。

夏子は起き上つて机の上の時計を見た。その時に昨夜も遅くまで書き直し書き直して、とうと書けずに終つた、先生へ宛てゝの手紙の書きか

けが目についた。そして、冴えない眉を尚ほ曇らしたが、そのまゝ床を離れた。

夏子はお母さんと二人で郊外の小さな家に住んで居た。夏子は此頃の若い女にしては感心といつてよい程にお母さんに優しかつた。しかも夏子に對するお母さんの愛は、いふ迄もなくそれ以上であつた。殊に四年前に一人の姉を遠くへ嫁げてから、母一人子一人の愛情は尙一層の濃密を加へた。

夏子はどんなに心の面白くない日でも、お母さんの傍に居れば樂しかつた。どつちかといへば無口の方の夏子は、お母さんとも餘り口數多い世間話などもしないけれども、お母さんが針仕事などして居られる傍に坐つて居る時には、ちつと黙つて居ても心は淋くなかった。さういふ時お母さんの方は心が淋しくないといふ丈けでは物足りなかつた。お茶でもいれようかねえと言つては、立つて立つて居なければならぬ満員電車を考へるの行つて、茶簞笥からかきもちの罐などを持ち出して來て娘にすゝめた。夏子は甘いものよりもこん

なものゝ方が好きであつた。それを知つて居るお母さんは、築地の親類などへ行つた歸りには、わざとあつちへ廻つて、たまるやのかきもちを買つて來た。日曜の午後など、母子はよくそれをつまみつまみ罪もない話をした。

その優しいお母さんは、娘の出勤を遅れさせない様にと、朝の勝手の用を一人でして呉れた。そして朝々の膳のものなども何彼と氣をつけて少しでも愉快に、少しでも心持よく娘の出勤を送り出すようにと心を用ゐた。夏子は毎朝それを有り難く思つた。そしてお母さんと相對して食臺に向つて居る間は、此頃の悪い癖になつたいやな寝起きの心持ちをもすつかり忘れて仕舞つた。

併し、家を出ていざ幼稚園へ行くとなると、心が妙に進まなくなる。あの推し込められる様にして立つて居なければならぬ満員電車を考へるのもいやだつたが、それよりも幼稚園に行くといふことが暗い笠の様に頭を壓した。それでもお母さ

んにそんな氣振りでも見せて心配させては済まない。今朝も夏子は風呂敷包みを持つて、元氣ように行つて参りますを言つて、家を出た。

## 二

今朝は夏子が一番早かつた。廊下の硝子戸をあけて居た小使の爺やが、いつもの威勢のよい聲で『先生お早う御座ります』

と言つた。此頃の夏子には此の年寄りの始終快活に屈託のない動き振りや話しの調子が不思議の様にも思はれ、又非常に尊いものにも思はれてならなかつた。そして心にいろいろのことを感じれば感じる程、ものゝ言へなくなる夏子は、たゞ一寸笑顔を向けて。

『お早う』

と簡単な答へをしたまゝ、職員室へはいつて、自分

の椅子に腰をかけた。そして目の前の大戸棚の障子戸に映つて居る自分の姿を見て、殆んど無意識的に頭へ手を上げて髪をなほして居たが、ふと

気がついて、立つて行つて窓のカーテンを開いた。窓の外には八つ手が大きな葉を擴げて茂つて居た。夏子はものに恐じる様な目でちつとそれを見つて居た。其の時入口のドアが開いて藤野がはいつて來た。

『お早う。大層お早いのねえ、私當番なのにこんなに遅れて仕舞つて。』

『私も今來たばかりですの。』

『家の遠い方の方が早くて、近いものが遅いなんて逆さねえ。』

『藤野さん、その大きな包みは何に。』

『これ。あてゝ御覽なさい。』

藤野の黒目がちな睫毛の長い目がにこくと笑つた。

『お早う』

『分りませんのね。』

『まあ當てゝ御覽なさいな。』

此人の無邪氣な、あとけない態度には、夏子の心もいつか解けた。そして、窓を離れて藤野の

傍へ来て、

『さはつて見てまい、でせう。』

と笑ひながら言つた。藤野は手を擧げて遮りながら、

『さはつては駄目。さはつたりすれば直ぐ分るものなのなんです。ひつくりなきつては、いけませんよ。』

といひながら、包みを解いた。

『あらまあ。』

包のなかは鶏であつた。包みを解かれた鶏はぐつと首をのばして、ぱた／＼と羽ばたきをした。藤野は風呂敷を持つたまゝ驚いて肩をひいたが、夏子と目をあはせて、いつもの朗かな聲で笑つた。

『どうなさつたの。』

夏子も餘りのことに吹き出した。

『今日私ひよつこのお話をしようと思つて、その時これを皆に見せようと思つて。父は大事の鶏なんでしょう。いけないつて言つたんすけれど、

私無理にそいつて持つて來ましたのです。ですけれど途中電車の中なんかで啼き出されたら困るでしょう。だから今朝歩いて來ました。前の籠がまだ物置にありますねえ。あれへ入れてやりましようと思つて。』

夏子は、お話の材料として、わざ／＼鶏を、しかも其の爲に歩いてまで持つて來る藤野の熱心が深く感せられた。そして、自分より歳下の、此の無邪氣な藤野に較べて、経験もちつとは餘計あり、待遇も上にされて居る自分の此頃の心持ちはどうしたことかと、自ら責めないでは居られない氣が起つた。そして、藤野に手傳つて鶏の籠を出しに行かうとした處へ、主任の石岡と木田とが來た。そして、もう一度皆で鶏を圍んで笑つた。しかし、驚いた鶏が妙な足取りで、きちんと片づいて居る主任の机の上に歩いて行つた時、潔癖な石岡の眉の邊に一寸皴がよつた。敏感な夏子にはそれがすぐ分つた。藤野は一人で籠を出しに行つた。

今日は夏子の組に缺席が二人あつた。其の一人は芳枝さんであつた。従兄の三郎さんに、どうなつたのでしうと聞いても、知りませんと答へた。

夏子は何だか氣になつたが、忙しい朝の保育でいつもかまされて仕舞つた。

夏子は皆に折り紙を配つた。いろ／＼の色を子供の好きなまゝに撰ばせながら配つた。そして『今日は皆さんのお好きなものを自由に折つて御覧なさい。』

と言つて、自分は何の氣もなく紫と白とを二枚ぬいて手に持つた。

一人の男の子が

『先生、なあに。』

と大きな聲を出した。

夏子はにこつと笑ひながら皆を見廻しておいて、静かに其の子の傍へ行つた。そして首を軽くかしげて極く小さい聲で、

『何を折りませう。花を折りませうか。』  
と話しかけた。さつきの大きな聲に驚いて一齊にこちらを向ひた子供達も、再び静かに銘々の折り紙を始めた。

『花なら赤でなくつちやあ』

男の子の聲は、今度はずつと低かつた。しかも、

夏子自身の耳へは、この方が強く響いた。

夏子は此頃、子供のいふことが、妙に氣にかつた。今迄不用意に聞き流した様のことが、妙に六かしく考へられて來た。今も、此の子供の言葉

が、夏子の頭の中へひつかゝつた。夏子の頭の中には、初め何の考へもなしに花を折りませうかなどと、いはゞ口から出まかせなことを言つたのが非常に悪いと責めて居るものがある。それと同時に、紫の藤の花、白い百合の花といふ二つの觀念がいやに反抗的な氣分をとつて起て居る。又一方には、花ならば赤といふ子供の簡単な併し純な斷定を、どうすなほに受取つてやらうかといふ心持

ちも湧いて居る。

此の時入口の戸があいて、校長が參觀人をつれてはいつて來た。夏子は其の音にびっくりした様に頭をあげたが、すぐ立つて校長の傍へ行つた。

そして今折紙をさせて居ますといふことを告げた。校長は參觀人に何か説明しながら、あつちこちと室内を見廻して居たが、不意に遊園の方で子供の笑ひ聲が大きく起つた。それと共に鶏の駆けながら啼く聲が聞えたので、校長は參觀人と共に其の方へ出て行つた。

#### 四

お晝前から急に曇つて來た空は、ボツ／＼と雨になつた。その爲に午後は子供達を室内で遊ばせた。歸りの時刻には子供の家から傘や足駄や外套などを持つて迎へに來た。平生できへごた／＼するお歸りが今日は一層騒ぎをした。保母は皆忙しく子供達の世話ををしてやつた。

夏子も甲斐々々しく自分の組の子供を皆歸し

て、ほつと息をする様な氣持で玄關の柱へ倚りかかつて立つた。他の保母が職員室へはいつて仕舞つた後までも一人で立つて居た。

夏子は急に耳の中がしんとする様な氣がした。

今迄のにぎやかさに引きくらべて、あたりが總べて深山の奥で、もあるよう静かであつた。夏子は其の静寂の中で、自分の心臓の鼓動が聞える様な氣がした。のみならず、自分の鼓動が其の静寂の中へ波動してゆく様に感じた。仕舞ひには自分がその静寂の中へ溶けて消えてゆく様の気持ちがした。すると其の次の瞬間には、何故とも知らず眼の中が潤んで來た。

夏子は、ゆうべの手紙を思ひ出した。夏子には最も心服して居る一人の恩師があつた。それは女學校の時の受持の先生であつた。それから卒業して後も、始終何彼と指導を受けて居る。夏子が幼稚園保母になつたのも其の先生のおすゝめがあつたからであつた。先生は夏子の母さんと同じ様に、

若い時からの未亡人で、夏子よりは年下ながら一人のお嬢さんがおりだつたりして、夏子の境遇や心持ちに充分な細い理解を持つて下さつた。夏子は自分の精神上の問題に就ては、何事でも教へを受けて居た。殊に先生は淨土真宗の美しい信仰を持つて居られて、別段更まつて信仰の話をせられるといふことは滅多にないけれども、折にふれ時にふれ、親鸞上人のお話や、嘆異鈔の中の言葉などが、先生の口から漏れることは少くなかつた。さういふ時には、夏子は殆んど酔はされる様な心持ちで其のお話を伺つた。そして、信仰といふ處までは、まだく行かないけれども、純美なる絶対他力信仰の生活の高貴さは若い夏子の心を強くひいた。

夏子は此の間から、自分が保母として少しも適當な資格のない人間でありますから、それを辭したいといふことを、此の先生の許へ書きかけ書きかけしては書けないで居るのである。夏子は此の半

年程前から自分の毎日して居ることに、何んだか、つかまへ處がない様な氣がして來たのである。つかまへ處がなければ力の入れようもない。力の入れようがなければ心の張り様もない。勿論、それは今始つたことではない。今迄一度だつて、つかまへ處があり、眞に力を入れて居たのではないが、前にはそれを何とも心づかずに過ぎた。此頃それが氣がついて來たのである。氣がついて見ると苦しくてたえられない。同じ苦しいと言つても手答へのある苦しさならば忍ぶに張りもあるが、此の苦しさは何と形容してよいか分らない、いやな苦しさである。人からはどう見えるか知れないけれども、自分にして居る日々の保育が、勿論、わざとなまけて居るのではないが、ちつとも力の籠つた、ほんとうに真剣のものではない。之れではならないと思ふけれども、どこに力の入れようも張りようもない。こんな風であるから自分のして居ることを、よいなり悪いなり、兎に角く自分では

つきり見つめ度いと思つても、それが出来ない。自分は毎日何かして居るようだけれども、凝視するとの正體が分らなくなる。夏子は此頃始終こんな悶へにじらされて居るのである。疲れると言つても、うんと力を入れて疲れるのなら心持ちはよい。其の疲れには一種の快感さへ伴ふ。しかし、併し、夏子の疲れは影を追つかけて捉へようとしで居る人の様な空虚な疲れである。

自分に張り合ひがない。こんな有様で仕事に何の感興が起らうぞ。夏子は決してなまけはしない。勤務を怠りはしないけれども、自分自身では済まない様な心持ち許りして居る。それを皆先生へ申上げて叱つて頂くなり、斷然保姆を辭するなり、きつぱりしたことにしておきたいと思ふのである。しかし、自分でも捕捉し難い此の心持ちは、中々筆には書きあらはせない。それに、自分を信じて、毎日専念に勤めて居ると思つて喜んで居て下さる先生に、此の不甲斐ない有りのまゝを申上げるのが、

いかにもつらいと思ふ心も手傳つて來て、手紙はいつでも書き直し許りした。昨夜も幾度か書き直し、書き直して、とうく疲れて寝て仕舞つたのであつた。

職員室でにぎやかな笑ひ聲がした。夏子は、はつと自分にかへつて柱を離れた。そして、さつき子供が落して行つた紙屑を拾つて、それを持つて職員室へはいつた。

## 五

芳枝さんが入院したといふことを聞いたのは、それから七日許りたつて後であつた。あの日以來芳枝さんは續いて休んで居て、届書で病氣とは知つて居た。しかし、別に大したことでもあるまいと思つたし自宅へ見舞ひにゆくのも夏子の性質には非常におつこうであつたので、氣にはなりながら打過ぎて居た。處が三郎さんのお迎ひの女中から、昨日急に御入院で、随分お重い御病氣で大層おやせになりましたさうで御坐いますといふこと

を聞いた時、夏子は非常に驚いた。そして、緑色のさつぱりした洋服を着て、お垂髪<sup>さげ</sup>の横の方に洋服と同じ色のリボンを蝶々に結んで居る、おとなしい芳枝さんの姿が目の前に浮んだ。

其日幼稚園が終ると直ぐ夏子は病院へ見舞に行つた。看護婦に案内されて病室の前へ來た時に夏子は胸がおされる様な氣がした。病室の入口にある高森芳枝殿といふ札を見ただけで、夏子の目は涙ぐんだ。ノックすると、中から上品な聲で『どうぞ』

といふ答へがあつて、静にドアーガあいた。

『…………』

と、期待しないうれしさに先づ夏子を迎へたのは、芳枝の若いお母さまであつた。

『どうも誠に恐れ入りました。芳枝さん、うれしいでせう。先生がいらしつて下すつて、さあ、どうぞ、こちらへ……』

と、芳枝の枕に近い處で椅子をすゝめた。

夏子は丁寧に頭をさげて、先づ何と言つてよいか口ごもつた。一寸見たゞけで、芳枝さんは思つたよりも重症らしいのである。雪白の上包みをした軽い毛布を胸の邊までかけて、寝臺の上におとなしく仰向けに寝て居る芳枝さんの頬は、見るにたえない様に瘦せて居る。前から白かつた顔色は、血色が消えて青味を持つて透き通る様に見える。目だけは却つて大きく見えるが、あの澄み透つたぱつちりとして鈴の様に張りのあつた、美しい目が、だるさうに衰へて居る。夏子は其の目をぢつと見て、

『芳枝さん……』

といた切り、あとが言へなくなつた。そしてお母さまの方へ向いて、

『さぞ御心配でいらっしゃいましよう。御入院遊ばしてから、少しでもおよろしいので御坐いましょうか、』

と、初めて見舞の言葉を述べた。

夏子は持つて來た麥藁細工を出して、芳枝に見

せた。そして、

『芳枝さん、早くよくなつて幼稚園へいらつしや  
いねえ。』

と言つた。芳枝は黙つて先生の顔を見て居たが、  
『いゝことねえ。お禮をおつしやるんでしよう。』

といつてお母さまが其の麦藁細工を受取つて、芳  
枝の右の手に持たせると、芳枝は先生の顔を見た

まゝにこつと笑つた。

夏子は側を向いて、そうと目を拭つた。室内が  
餘り湿ぱいので、にぎはさうと思つたのか、看護  
婦が活潑な、しかし優しい聲で、

『きれいで御坐りますねえ。お嬢さんも幼稚園で  
こんな奇麗なのをお揃へになりますのですか。私  
に一寸拜見させて下さいまし』

と言つて、その麥藁細工を芳枝の手から取つて、  
さも面白さうに、自分の顔の前で、くる／＼と動  
かして見て、寝臺の頭の處へ、芳枝に見える様に、

さした。

その間も芳枝は先生の顔ばかり見て居た。そし  
ては時々微かに笑顔をした。

夏子は、女中がお茶をついで出したのをきづか  
けにして、芳枝の目と自分の目とを離した。そし  
て、丁寧に皆に暇を告げて、芳枝の肩の邊へ軽く  
一寸手をやりながら、

『では、また遊びに参りますよ』

と言つて病室を辭した。そしてことわつてもく  
送つて來て呉れたお母様と分れて、病院の玄關を  
出た。(つゞく)

### ○フレーベル紀念會

先月廿一日のフレーベル紀念會は、午後三時より東京女子高等  
師範學校附屬幼稚園に於て催され、倉橋惣三氏の『フレーベルを  
憶ふ』と題する講演ありたり。

○日本兒童學會總會  
本月十四日(日曜)午前八時半より東京醫科大學法醫學教室講  
堂(赤門を入り突き當り)に於て開會兒童學上の諸講演ある筈。聽  
講隨意なり。

顧問高島平三郎先生



## 日一本の繪雑誌

本誌の特色

- 最もまじめなこと
- 最も教育的なこと
- 最も平易なこと
- 繪の美しいこと
- 記事の面白いこと

本誌は最も着實にして教育的幾多畫雜誌中獨自の地歩を占む。記事は全部片假名にて極めて平易。八九歳以下の子供の絶好伴侶なり。

東京市小石川町五丁目一七五号発行所

社モード  
番番六七九一  
番番六七九一  
番番六七九一

定價一冊拾錢  
郵稅五厘  
 六冊郵稅共  
五拾八錢  
 十二冊郵稅共  
共壹圓拾錢  
 總て前金の  
事

# 日本一の幼木日

□ 倉橋惣三先生監修

本誌は、三歳から拾歳までの子供の爲め美しい繪と、面白い嘶とを、教育的に組み合せた他に比類なき繪雑誌です。

本誌は、玩具とお嘶との興味及び教育的價値を兼ねあはせたるもの、子供には何よりも喜ばれ、何よりもよき友達となります。

定 價

壹冊拾錢 □半年郵稅共六拾參錢  
郵 稅 壹 錢 □壹年同 壹圓貳拾錢

婦人畫報  
少女畫報

發行所 (東京) 橋鍛冶橋外  
振替 東京四九〇〇

東京社